



Title	脳神経倫理学の嚆矢としてのParfit論
Author(s)	七戸, 秀夫
Citation	応用倫理, 10, 17-25
Issue Date	2017-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.10.17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68204
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_02shichinohe.pdf



研究ノート

脳神経倫理学の嚆矢としての Parfit 論

（『理由と人格』第 12 章より）

七戸秀夫（北海道大学）

要旨

Parfit の「理由と人格」（1984）において分離脳研究の思考実験で著名な第 12 章を中心に、Parfit とその後に発展した脳神経倫理学、特に倫理の神経科学（neuroscience of ethics）との関係を検討した。また、分離脳研究を発展させた Sperry と Gazzaniga を中心に認知神経科学の発展の歴史を振り返ることで、Parfit が神経科学に注目した理由を探った。しかし彼の理論にとって脳の実際の物理的構造はほとんど重要性を持たないため、思考実験自体にリアリティーが欠け、分離脳研究の解釈にも問題点が見られた。また、自らはオーソドックスな倫理学のフィールドから足を踏み出すことがなく、脳神経倫理学という新たなフィールドを開拓しなかったことは、Parfit の限界といえる。それでも、脳神経倫理学の夜明け前に脳の構造と倫理学的課題を（無自覚的ではあっても）結びつけ、結果的に脳の構造に関心を抱く人々に倫理学的課題がごく身近にあることを理解させた彼の功績は、脳神経倫理学の嚆矢と呼ぶべきである。

Abstract

Derek Parfit: The whistle for starting neuroethics

Chapter 12 in the book, *Reasons and Persons* (1984), written by Derek Parfit, has a well-known content on thought experiments based on “split-brain” researches. In this study, we aimed to interpret chapter 12 based on the “neuroscience of ethics” point of view in neuroethics. Moreover, we also considered the ideas of Sperry and Gazzaniga, who were the leaders of “split-brain” researches and the growth of cognitive neuroscience because of their influence in solving the issue as to why Parfit was interested in neuroscience.

Parfit’s thought experiments lacked reality, and his comprehension of “split-brain” researches was unsuitable because he believed that the real brain structure and mechanism were not so important. Furthermore, his research was evidently limited to the field of authentic ethics and not as a pioneer of a new field such as neuroethics.

However, he still greatly contributed in establishing neuroethics. In the book, *Reasons and Persons* (1984), he unconsciously reported the relationship between the real brain structure and mechanism and the ethical issues before the dawn of neuroethics. Consequently, he told the researchers interested in the real brain structure and mechanism that ethical issues were just next door to them. Therefore, he played a role in the whistle for starting neuroethics.

1. はじめに

本稿では Parfit の「理由と人格」（1984）において、分離脳研究の例示とそこから人格の同一性に関する諸問題へと展開する思考実験で著名な第 12 章を中心に、Parfit とその後に発展した脳神経倫理学との関係を論ずる。一般的に脳神経倫理学で取り扱われる内容は神経科学の倫理（ethics of neuroscience）と、倫理の神経科学（neuroscience of ethics）の 2 つに大きく分けられるが、本稿では後者との関係を取り上げる。また、分離脳研究を発展させた Sperry と Gazzaniga を中心に認知神経科学の発展を経時的に紹介することにより、Parfit の「理由と人格」と脳神経倫理学との関係について考察を試みる。

本稿で取り上げる第 12 章は「第 III 部 人格の同一性」の一部であり、この第 III 部は第 10 ～ 15 章の 6 章からなっている。第 III 部の前半 3 章では 3 つの重要な、そしてそれぞれに関連性を持つ思考実験が行われている。まず第 10 章「われわれは自分自身を何であると信じているのか」では、米国 SF テレビドラマ／映画「スタートレック」（1966 ～）の小道具である転送装置を想像させるような「遠隔輸送機」が登場している^[1]。ここでは、単純な遠隔輸送（私の脳と体は破壊され、火星に私のレプリカが作られる）のケースに加え、分岐線ケース（私とレプリカはあたかも分岐線のように数日間だけ重なり存在するが、その後に私は死亡しレプリカだけ残ることになる）を挙げ、日常的に考えられている人格の同一性に対して疑問を投げかけている。すなわち、Parfit は「人格の同一性は重要なことであるという見解（中略）は自然な見解である。対立する見解は、人格の同一性は重要なことではないというものである。私は次のように主張する。重要なのは〈R 関係（正しい種類の原因を持った心理的連結性および／あるいは心理的継続性）〉である。」^[2]と提起している。

第 11 章「われわれは自分たちが信じているものではない。それはいかにしてか」では、最初に記憶に関する小さな思考実験（「ヴェネチアの記憶（他人のヴェネチア旅行の記憶が脳にコピーされる）」^[3]、「私の妄想（神経外科医がスイッチを押すことで私にナポレオンの記憶が移植される）」^[4]）や、エピソード（日本女性とケルトの戦士との転生）^[5]が紹介され、それらの後に重要な思考実験（脳と体の細胞を 0 から 100% まで 1% ずつそっくりの代替物と取り替えるというもの）が行われる^[6]。これは前章の遠隔輸送の思考実験（脳と体の細胞をそっくりの代替物と 100% 取り替えることと同義）をうけ、そこに物理的スペクトラムの観点から議論を進め、さらに「連鎖式の問題」（もしくは「堆積のパラドックス」）に持ち込むことにより、人格の同一性に関し物理的継続性は重要でないという持論を固めている。

そして、第 12 章「われわれの同一性は重要なことではない。それはなぜか」において、分離脳研究に着想を得た思考実験が行われ、第 13 章以降ではこれらの「実験結果」をもとに人格の同一性に関する議論（第 13 章「重要なこと」、第 14 章「人格の同一性と合理性」、第 15 章「人格の同一性と道徳」）を展開するという構成になっている。

2. 分離脳研究に基づく思考実験

ここでは、「理由と人格」第 12 章で行われた、分離脳研究に基づく思考実験について検討する。

Parfit は第 12 章冒頭で、てんかん患者に対する脳梁離断術（左右の大腦半球を連結する線維——脳梁——を離断する手術）後の症例、いわゆる分離脳を詳細に検討した Sperry の報告（1966）^[7] を引用している。「（手術の）目的は達成されたが、手術は意図されない別の結果を生んだ。ある外科医の言葉によれば、『二つの別個の意識の領域』が生じた」^[8] という、分離脳患者の様子に Parfit は着目している。しかし、この「二つの別個の意識の領域」が生じたようにみえる状態は、医学的には離断症候群と呼ばれる高次脳機能障害である。19 世紀欧州の神経内科医らにも、頭部外傷や脳腫瘍などによる脳梁損傷により何らかの高次脳機能障害が生じることはすでに知られていたが、Sperry らの 1960 年代の研究によってその詳細が明らかにされた。さらに一般に広く知られるようになったのは、Sperry の研究業績に対して 1981 年にノーベル生理学・医学賞が与えられてからである。

Parfit は、この分離脳研究からシンプルに着想した、「私の物理の試験（私は試験の最中に両大腦半球の連結を断ち、心を分割する。おのおのの大腦半球に違う方法で問題を解かせ、心を再統一した後で良い方の答えを採用する。）」^[9] という思考実験を最初に披露している。このケースでは大腦半球の連結を断つことにより二つの別個の思考と感覚の系列が生じ、このことから記憶や意識の統一性が決して必然ではないということが主張される^[10]。ただし、この思考実験では両大腦半球の機能が同等であり、機械的に任意に両半球間の連絡を途絶したり、再統一することが可能であるという前提を置いた想像上のケースを用いている。次に登場するのが「私の物理の試験」をさらに発展させた、また「理由と人格」のなかでも特に重要な、「私の分裂」という思考実験である^[11]。私は一卵性の三つ子の一人であるとし、私の身体は致命傷を負い、二人の兄弟は脳に致命傷を負っている。私の脳は分割され、それぞれの兄弟の身体に移植され、その結果生じた各人は、自分を私と信じ、私の記憶があり、私の性格を持ち、私とそっくりの体を持つとした。この思考実験では、心理的継続性や身体的継続性が人格の同一性を担保するわけではないことを示し、さらに第 10 章から提起されている「人格の同一性は重要なことではない、重要なのは〈R 関係〉である。」という命題を結論付けた。

一方、Parfit は上述したように、「人格の同一性は重要なことであるという見解（中略）は自然な見解である」^[12] としている。人格の同一性は重要なことであるという見解は自然であるが故に、通常はそれが脳の一機能であるとは意識され難い。しかし、健常人が「われわれは自分自身が継続して存在する」^[12] という意識をデフォルトで持つのであれば、それは人格の同一性に関する生来の脳機能と考えることも可能である。さらに言えば、脳の構造（マクロなものだけでなく分子細胞レベルの構造や、メカニズムも含まれる）がその機能を生んでいるはずである。一方で脳梁離断術や脳梁損傷のように脳の構造が破壊された時には、脳の機能に対しては障害という形で反映される。例えば、脳の運動野やそれに引き続く錐体路が破壊されれば運動麻痺が生じるし、視覚野が破壊されれば視野欠損が生じる。脳を左右に分割することは、脳の構造を破壊することであり、脳機能も障害される。実際に Sperry の共同研究者であった Gazzaniga によると、分離脳研究を進めるにつれ分離した脳に二つの心があるという考えに至ったという^[13]。しかし、それはあくまで脳梁が離断されたことによる脳機能の障害である。人格の同一性に関連する機能障害が生じた脳を基にした思考実験を例示して、人格の同一性が重要であるかどうかという問いは、「空虚な問い」^[14] といっても良いだろう。すなわち、人格の同一性が障害されうることと、人格の同一性が重

要でないということは全く別な話であるからである。

しかし実際には、脳梁離断術といったマクロな脳梁構造の破壊によっては、人格の同一性に関する脳機能自体は障害されないだろう。ここでは Nagel が紹介し^[15]、Parfit が第 12 章で引用した「ある人物が今見たものを手探りで取り出すように命じられているとして、もし『帽子』という文字が左にひらめくと、左手は一群の隠された品物の中から帽子を取り出すだろう。それと同時に、彼は何も見なかったと言葉では言い張るだろう。」^[16]という、Sperry らの実験を考察する。確かにこの実験では、分離脳患者が「二つの別個の意識の領域」を持つように見える。しかし Gazzaniga らによるその後の検討では、「(左脳としては) 何も見なかった」という実際の状況を飛び越えて、ある行為をしようとした衝動を正当化するため、左脳が何か適当な言い訳（この場合では、前から帽子が気になっていた等）を後付けで無意識に作りだしてしまうということが見出された^[13]。これについて Gazzaniga らは、左脳のインタプリター（解釈者）領域が「(脳内の) 個々の活動の解釈を試み、統一のとれたものとして自己を感じられるようにしている」と考えている^[17]。このことは、人格の同一性に関する機能（すなわち、「統一のとれたものとして自己を感じられる」機能）が保たれたまま、「二つの別個の意識の領域」が生まれることで生じる不都合こそが離断症候群であるということを示しているように思われる。インタプリターに関する論文^[18]の発表は 1989 年なので仕方のないことではあるが、本来、Parfit の人格の同一性に関する研究にとって分離脳は不適切な例示だったと言える。一方、人格の同一性の障害ということにより適切な疾患例を挙げるとすれば、解離性同一性障害（米国の精神障害の診断と統計マニュアル DSM-IV（1994）で初めて取り上げられ、それ以前は「多重人格」が診断名）であっただろう。Parfit がもしこちらに関心を抱いたとしたら、どのような思考実験を生み出したかは、とても興味深い。

その結論はともあれ、Parfit はこの議論において倫理学と脳構造との間に関係性があることを強く示唆した。また、これは 1984 年当時としては画期的なことであった。しかし、その後も彼はオーソドックスな倫理学のフィールドから足を踏み出さず、脳の構造やメカニズムを土台にした倫理学、すなわち脳神経倫理学を自ら切り開くことはなかった。Zoloth は脳神経倫理学の観点から、古典的議論として Descartes、James、Dewey、Russell、Skinner、Armstrong、Nagel、Searle らと並んで Parfit を取り上げ、「意識の問題についての Parfit の考察は、脳神経科学の研究からはじまる」も、結局は「Parfit にとって重要なのは、単に意識の連続性の知覚だけであり、彼の理論にとっては、脳の実際の物理的構造はほとんど重要性を持たない」と結論づけている^[19]。

3. 脳梁離断術と分離脳研究

次に、なぜ Parfit が Sperry らの研究に着目し、人格の同一性に関する思考実験を行うに至ったのか、その背景をてんかんにおける脳梁離断術と分離脳研究の歴史的経緯を交え考察する。難治性てんかんに対して、脳梁を切断することにより一側で生じたてんかん性の興奮を対側に波及させないようにし、てんかん症状（特に転倒てんかん）を軽症化させる手術（脳梁離断術）は、1940 年に Van Wagenen と Herren により初めて報告された^[20]。その後しばらく、この手術は日の目を見ることはなかったが、1960 年代初頭に Bogen と Vogel が再開し大きな注目を浴びた（なおこの術式は、ほぼ同時代に開発された精神外科の手術であるロボトミーがその強い副作用のた

め捨て去られたのとは異なり、適応症を難治性てんかんの一部に制限することで、現在でも有効性が証明されている）。彼らの症例では脳梁機能及び離断症候群が詳細に検討されたが、その神経心理学的な検討を行ったのが Sperry らであった^[7]。

Roger Wolcott Sperry (1913 - 1994) は米国の神経心理学者であり、1954 年にカリフォルニア工科大学の神経心理学の教授に就任した。1981 年にノーベル生理学・医学賞を受賞したが、受賞理由となった業績は分離脳研究である。てんかん治療の目的で脳梁離断術を受けた患者に、片方の脳半球に依存することが知られている作業を行ってもらい、二つの脳半球がそれぞれ独立した意識を持っていることを示した^[13]。この研究では左右の脳半球の機能分化の理解に大きく寄与したが、一方 Sperry が明らかにした事実は歪曲されたり拡大解釈されたりして世間に流布された。認知心理学者である道又によると、ノーベル賞受賞後、Sperry らの研究成果がマスコミを介して世間にセンセーショナルに報じられ、分離脳者にも取材が殺到した。研究者らも事実以上のことを語り、短時間に多くのファンタジー（「右脳人間」、「右脳の潜在能力開発」など）が生成された。このようなノーベル賞受賞後の騒動の中で、Sperry とその共同研究者である Gazzaniga は対立し、以後 Gazzaniga は独自の道を進んだという^[21]。

このように 1984 年に発表された「理由と人格」の中で、Parfit が分離脳の例示をもって「人格の同一性」に関する思考実験を行ったのは、1981 年に Sperry がノーベル生理学・医学賞を受賞し、その業績として分離脳研究が世に広まったことがきっかけとなったであろうことは、想像に難くない。実際、第 12 章は「近年のいくつかの医療ケースは、〈還元主義的見解〉を支持する顕著な証拠を提供する。（傍点筆者）」^[22] という文章から始まっているが、引用された Sperry の論文はすでに 1966 年に発表されたものであり、さらには離断症候群自体、19 世紀には知られていた病態だからである。

4. 第 III 部における分離脳研究の位置づけ

ここでは、分離脳研究とそれに基づく思考実験が「理由と人格」第 III 部においてどのような位置付けであるか、第 III 部の成り立ちから考察する。Parfit は 1971 年に「人格の同一性」という論文を発表しているが^[23]、「理由と人格」第 13 章の後半（「100: 部分的生存」と「101: 引き続く自我」）にある 3 つのシェーマは同論文がオリジナルであり、これは第 III 部の前身といってもよい。しかし、同論文には分離脳に基づく思考実験や、他の 2 つ（遠隔輸送器と 1% ずつの細胞移植）に関して記述はない。一方、第 12 章には分離脳研究に関する Nagel の論文^[15]が引用されている。これは分離脳と意識の同一性をテーマに、1971 年に発表されたものであるが、Parfit は自らの論文「人格の同一性」とテーマが近く、同じ年に発表された同論文にかねてから注目していたと考えられる。第 12 章では他にも Williams や Wittgenstein に言及しているが、Nagel の扱いが特別であることは、Nagel の見解に対する論証をわざわざ別に補論 D^[24]として項立てしていることから窺える。

ここまでの事項から第 III 部の成り立ちを推察する。まず 1971 年発表の「人格の同一性」論文が礎石となったと考えられる（第 13 章後半部）。そして、議論を膨らませるため新たに〈R 関係〉という概念を定義し、第 10 章（遠隔輸送器の思考実験）と第 11 章（1% ずつの細胞移植の思考実

験）が加筆された。その間隙を埋めるように、1981 年秋の Sperry のノーベル賞受賞をきっかけとして Nagel の論文と自らの分離脳研究に基づく思考実験を題材に第 12 章と第 13 章の前半部（「98: シリーズ—人格」）には、「あなたは私が 1982 年 11 月にタイプした文章を今読んでいます。」^[25]とある）を著述した。これによって前後の文章が橋渡しされ一連の文章となり、さらに第 14、15 章（これらにも分離脳研究に基づく思考実験が言及されている）が書き加えられ、第 III 部が完成したと考えられる。すなわち、Parfit にとって分離脳研究とそれに基づく思考実験は、ジグソーパズルの最後に残った重要なピースであったと考えられる。

5. Einstein の思考実験との相違

次に、Parfit による分離脳に関する思考実験についてその特徴と限界を考察する。「理由と人格」では各章で様々な思考実験が試みられており、それがこの本の大きな魅力でもある。先立つ第 11 章では、科学者が「私」の脳と体の細胞を 1% ずつ代替物と取り替える時、果たして何%入れ替わった時に「人格の同一性」を失うだろうかと読者に問う^[26]。その上で、Parfit は「そのような想像上のケースが決して可能にならないだろうとしたら、それは問題だろうか？」^[27]と訴える。しかし、これは Parfit 自身による「そのような想像上のケースが決して可能にならないだろうとしたら、思考実験で示される理論的な課題と現実世界の実践的な関心との乖離を、読者は問題とするだろう」という一種の告白でもある。ちょうど、そんな魅力的ながらも甚だリアリティーにかけ思考実験を行っていた Parfit にとって、Sperry らの分離脳に関する新奇性の高い科学的知見は持論にリアリティーを与え、さらに持論を展開するまたとない機会であると考えたのではなかったか。しかし〈私の分裂〉の思考実験でも、「私の脳の神経と私の双子の身体の神経とを結びつけることはできない」^[28]とする一方で、「(技術的な) 不可能性は、それが可能であると想定した想像上のケースの考察を斥ける理由にはならない」^[29]と述べており、分離脳研究という新しく魅力的な課題を前にして、またもや同じようにリアリティーを失うような思考実験を繰り返してしまっていることを、恐らく Parfit 自身も気づいていたことだろう。

さて、Parfit は自らの倫理学上の思考実験を、Einstein が思考実験を行ったことと同一視し正当化を試みているが^[30]、その両者には大きな相違がある。まず、Einstein の思考実験として有名な「双子のパラドックス」を例に挙げる。「双子の兄弟がいて、弟は地球に残り、兄は光速に近い速度で飛ぶことができるロケットに乗って、宇宙の遠くまで旅行したのちに地球に戻ってくるものとする。このとき、弟から見れば兄の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように兄の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、兄の方が弟よりも加齢が進んでいない。一方、運動が相対的であると考えれば、兄から見れば弟の方が動いているため、特殊相対性理論が示すように弟の時間が遅れるはずである。すなわち、ロケットが地球に戻ってきたときは、弟の方が兄よりも加齢が進んでいない。これは前の結果と逆になっており、パラドックスである」^[31]、というものである。この「双子のパラドックス」では「兄が光速に近いロケットに乗る」ということが現時点で技術的に不可能であり、この議論を思考実験たらしめているわけであるが、この議論自体は徹頭徹尾、物理学という Einstein 自身や議論相手のフィールドから一歩も外へ出ていない。よって、長い時間が必要ではあったものの、地に足がついた物理

学的手法（航空機に乗せた原子時計の進みがごくわずかに遅れるという実験など）で、この議論に関する検証が可能であった^[31]。

一方、Parfit の思考実験で重要な鍵を握る分離脳研究は、専ら自らのフィールド（倫理学）外で行われており、彼にとっては思考実験の単なるトリガーに過ぎない。実証的な分離脳研究に着想を得て自分の理論にリアリティーを与えようとしたにもかかわらず、一卵性の三つ子の兄弟への片側脳の移植といった荒唐無稽な例を挙げてしまうため、結局のところ議論からリアリティーを失ってしまう。すなわち分離脳研究はスタートレックの転送装置（本文では遠隔輸送機）と同様、非常にぞんざいに扱われているといつてよい。このことは「理由と人格」で最初に登場する思考実験、「作家のケイト」^[32]と比較すれば明瞭となる。ケイトは一生懸命本を書くが故に過労で倒れてしまうが、以後の文章において道徳理論に関するオーソドックスな倫理的議論が繰り返される。そこでは、ケイトは脳を分割されず、原子レベルでコピーを作成されることもない。

しかし、これら倫理学の外から借りてきたトリガーは、やはり倫理学をフィールドとするこの本の読者にとっては無視することが難しい存在である。Parfit がトリックスター的存在として振る舞い、読者がそれに目を奪われることによって、議論や解釈は現実から遊離し浮ついたものになりがちとなる。このことこそが、脳が左右に分割されることによって生じる障害（離断症候群）をもって人格の同一性が重要であるかどうかという問いが、「空虚な問い」となってしまう所以である。そして、自らがオーソドックスな倫理学のフィールドから足を踏み出すことがなく、また脳の構造に関する知見を自らのフィールドとしなかった、Parfit の限界ともいえる。しかし、1984年の段階で脳の構造と人格の同一性という倫理的課題を（無自覚的であったとしても）結びつけた彼の功績は、脳神経倫理学の嚆矢と呼ぶべきである。最後にその点に関し考察する。

6. Parfit と Gazzaniga と脳神経倫理学

「Parfit にとって重要なのは、単に意識の連続性の知覚だけであり、彼の理論にとっては、脳の実際の物理的構造はほとんど重要性を持たない」^[19]が、結果として脳の実際の物理的構造に関心の強い人々に、倫理的課題がごく身近にあることを理解させた。さらに幸運であったことは、そのタイミングである。Ogawa らによって、MRI を用いて脳機能を測定する新たな手法（BOLD 効果）が発表されたのが1990年であり^[33]、その後 functional MRI としてまず実験心理学や認知心理学から、そして人間活動のあらゆるフィールドへ爆発的にその応用は広がった。そういう意味で「理由と人格」が発表された1984年は、まさに脳神経倫理学の夜明け前の状態だったと言える。そして、2002年5月に米国のダナ財団主催で国際カンファレンス "Neuroethics: Mapping the Field"（William Safire 会長）が開催された。神経科学者、心理学者、精神科医、哲学者、法学者、政策担当者など150名以上が参加したこの会議は、脳神経倫理学の今日に至るまでの議論の方向づけを定めた記念碑的出来事と目されている。

最後に Michael S. Gazzaniga (1939-) について触れる^[13]。米国の心理学者で、カリフォルニア大学サンタバーバラ校心理学教授であり、現在の脳神経倫理学のリーダー的存在でもある。Gazzaniga は1964年、カリフォルニア工科大学で指導教官 Sperry の元で Ph.D.（心理生物学）を取得した。多数のサルを使った動物実験や人間の分離脳患者を研究し、脳の左右の大脳半球間

の通信および側性化の研究に貢献した。その後、1989年に認知神経科学ジャーナル（Journal of Cognitive Neuroscience）の創刊を行ったが、彼は現在では当然のように使われている「認知神経科学」という言葉を生み出した一人である。2002年には米国の大統領生命倫理委員会のメンバーに選ばれその後8年間務めているが、委員就任を請われた時点では「私には生命倫理の知識はほとんどなく、適切な人材ではないのではないか」^[13]と述べていた。その委員会は哲学者、生命倫理学者、神学者から、医師、弁護士、科学者など様々な職業や信念をもつ18名の委員で組織されていたが、委員会で取り上げられた最初の主要なテーマはES細胞研究と胚の問題であり、7ヶ月にわたって生命倫理的な激論が交わされた。この過程で、認知神経科学者であり「生命倫理の知識はほとんどなかった」Gazzanigaは、そのフィールドを生命倫理学へと広げていったと考えられる。そして、上述した同年の“Neuroethics: Mapping the Field”に彼は招聘されており、Brain Science and Public Discourseというセッション（座長：Judy Illes）で、大統領生命倫理委員会での経験について神経科学者として講演している^[34]。彼は、ある意味偶然に脳神経倫理学の立ち上げに立ち会ったわけだが、この出会いの後に脳神経倫理学者としてのGazzanigaが誕生したのは、すでに彼がそのフィールドを生命倫理学へと広げていたことからみると、必然的であったと言ってもよいだろう。彼は自著の冒頭で以下のように述べている。「脳神経科学の研究室で人生を送ってきたものにとって、倫理や道德の問題について本を書くのは容易なことではない。書こうと思った理由ははっきりしている。私のように神経系の仕組みを調べている人間、とくに脳がどうやって認知や自己認識を生み出すかを研究している者は、すでに十分大きなテーマに取り組んでいるのだが、そろそろもっと大きな問題に手をつけるべきだと考えたからだ。^[17]」また彼は同書で、脳神経倫理学を「病気、正常、死、生活習慣、生活哲学といった、人々の健康や幸福に関わる問題を、土台となる脳メカニズムについての知識に基づいて、考察する分野である。」と定義し、「脳神経倫理学は脳から得られた知見に基づく人生哲学を模索する研究分野であり、またそうであらねばならない。」と述べている^[17]。

Parfitに、倫理学の新たな領域を開拓している‘元’分離脳研究者（Gazzaniga）のことをどのように捉えていたか、残念ながら今や尋ねることができなくなってしまった。しかし、第IV部「未来の世代」において世代間倫理を取り上げることで間接的ながら環境倫理学に大きな影響を与えたように^{[35][36]}、Parfitはオーソドックスな倫理学のフィールドから様々な応用倫理学のフロンティアへ鎗矢を射放ち、戦の始まりを皆に告げることこそが自らの役割と考えていたのかも知れない。

7. 結 語

「理由と人格」第12章を中心に、Parfitとその後に発展した脳神経倫理学との関係を論じた。Parfitは第12章において分離脳研究を例示し、そこから波及する思考実験により人格の同一性に関する諸問題へと展開した。彼の理論にとって脳の実際の物理的構造はほとんど重要性を持たないため、思考実験自体にリアリティーが欠け、分離脳研究の解釈にも問題点が見られた。しかし、1984年という早い段階で脳の構造と倫理学的課題を結びつけた彼の功績は、やはり脳神経倫理学の嚆矢と呼ぶべきである。

文 献

- [1] Parfit D『理由と人格 非人格性の倫理へ』勁草書房、1998 年、279 頁。（以下、「理由と人格」と略記する）
- [2] 「理由と人格」299 頁。
- [3] 「理由と人格」307 頁。
- [4] 「理由と人格」318 頁。
- [5] 「理由と人格」315 頁。
- [6] 「理由と人格」324 頁。
- [7] Sperry RW, in Eccles JC. ed. Brain and Conscious Experience, Berlin, Springer Verlag, 1966.
- [8] 「理由と人格」339 頁。
- [9] 「理由と人格」341 頁。
- [10] 「理由と人格」342 頁。
- [11] 「理由と人格」351 頁。
- [12] 「理由と人格」280 頁。
- [13] Gazzaniga MS『右脳と左脳を見つけた男』青土社、2016 年。
- [14] 「理由と人格」298 頁。
- [15] Nagel T, Brain Bisection and the Unity of Consciousness. Synthese. 22: 396-413, 1971.
- [16] 「理由と人格」340 頁。
- [17] Gazzaniga MS『脳のなかの倫理 —— 脳倫理学序説』紀伊國屋書店、2006 年。
- [18] Gazzaniga MS, Organization of the human brain. Science. 245 (4921) : 947-952, 1989.
- [19] Zoloth L「世界の中に存在すること：脳神経科学と道徳的行為者」、Illes J. 編『脳神経倫理学 理論・実践・政策上の諸問題』篠原出版新社、2008 年。
- [20] 馬場 啓至ら「脳梁離断術の歴史と手術適応」『脳神経外科ジャーナル』16 (3) : 177-183 頁、2007 年。
- [21] 道又爾（上智大学総合人間科学部）との personal communication
- [22] 「理由と人格」339 頁。
- [23] Parfit D, Personal Identity. The Philosophical Review. 80 (1) : 2-27, 1971.
- [24] 「理由と人格」633 頁。
- [25] 「理由と人格」399 頁。
- [26] 「理由と人格」324 頁。
- [27] 「理由と人格」305 頁。
- [28] 「理由と人格」349 頁。
- [29] 「理由と人格」352 頁。
- [30] 「理由と人格」305 頁。
- [31] 霜田光一「双子のパラドックスの実験的検証」『物理教育』21 (2) :73-78、1973 年。
- [32] 「理由と人格」8 頁。
- [33] Ogawa S et al, Oxygenation-sensitive contrast in magnetic resonance image of rodent brain at high magnetic fields. Magn Reson Med.14 (1) :68-78、1990.
- [34] http://dana.org/Cerebrum/2002/Neuroethics__Mapping_the_Field/
- [35] 池田和弘「世代間倫理における非同一性問題 —— 解決の不可能性と事後承認によるその無化」『ソシオロギス』27:1-16、2003 年。
- [36] 鈴木興太郎、蓼沼宏一「地球温暖化抑制政策の規範的基礎」、清野一治、新保一成編『地球環境保護への制度設計』東京大学出版会、2007 年。